

ピースウィークの企画の一つとして、被爆者のお話を聞く会を開きました。戦後76年を経過して被爆者の高齢化が進み、実際に体験したお話を聞くことは非常に貴重な機会です。

今回はしらすぎ会（埼玉県原爆被害者協議会）から高橋<sup>たかはしひろし</sup>溥さんを語り部としてお招きしてお話を聞きました。

高橋さんは広島に原爆が投下された時、爆心地から1.5キロ地点にある実家にいました。5歳と8カ月だったそうです。戦争のさなかの軍都では、昭和19年になると空襲が始まり、食事はすいとんコウリヤンでした。初めて経験することなので、コウリヤンもこんなものかと思っていたそうです。

8月6日の朝、緑の畑と青い空を見ていると飛行機がブーンと飛んできました。爆弾が落ちた瞬間は何も見えていないそうです。目の前が真っ白になり何も見えなくなった。家の下敷きになり生き埋めになっていたところを助け出されました。周りを見るとすべての建物が倒壊、焼失し、燃えかすの中に白い死体があちこちに転がっていたと言います。とにかく臭いがすごかった、腐ったものと死体の臭いです。目や内臓が飛び出た人、水を求めて川に飛び込む人・映画「ヒロシマ」のシーンが原爆の落ちた状況をよく表しているとおっしゃいました。

持ってきてくださった被爆者の描いた絵には、川に浮かんでいる多くの死体や高熱で皮膚がたれ下がった被爆者、宮島から見たキノコ雲などが描かれていました。

ご本人は山の上に白い月がかかった焼け野原の広島市街を描いたとのこと。写真では破壊されつくした街の様子や炭になった死体など、直後の悲惨な様子が写っていました。

投下された原爆はリトルボーイと呼ばれ、1キロトンで戦艦一隻が沈むほどの威力があるウランが使用され、15キロトンの威力があったと言われていました。想像を絶する威力で、一瞬のうちに15万人ほどの命が消えました。市電は6日後には動かしたとのことですが、その後も多くの方が亡くなり、広島市の平和公園には多くの遺骨が埋められています。生き延びた人たちも心身の不調や異常など、不安を抱えながら一生生きていかなければならないのです。高橋さんの淡々とした口調と絵画と写真によって、私たちは地獄ともいえる原爆投下直後の悲惨な状況をほんの一端であれリアルに感じることができました。被爆を経験した語り部として、原爆の悲惨さを新しい世代に伝えようという熱意がひしひしと伝わりました。

ご自身の記憶も貴重ですが、お父さまが当時の避難の様子を書き残してくださったメモも大変貴重なものだと思います。そのメモによって当時の被爆、避難の状況がより身近なものに感じられました。

このおはなし会に参加された方たちからも、「わかりやすいお話だった」、「真実は重みがある」、「貴重な機会」で「若い人にも聞かせたかった」など、アンケート等により賛同や感謝の声が届いています。

原爆は一瞬にして広範囲に暮らす多くの人の命を奪うものです。そこには軍人も町で暮らす一般市民の区別もありません。赤ちゃんもまだ母のお腹にいる胎児ですら被害を受けます。

日本は世界で唯一の戦争被爆国です。当時の歴史を学び被害者の声に耳を傾けて、核兵器のない世界を目指して努力していく義務を日本国民は負っていると改めて実感いたしました。

ピースウィークなどの機会を通して、多くの人に非核平和を伝える活動をしていくことは大切だと思いました。これからも続けていきましょう。